



先日の台風第2号による浸水を被られた皆様には、衷心よりお見舞い申し上げます。

梅雨明けが待ち望まれるこの頃ですが、蟬の声もそろそろ聞こえ始めています。二十四もの季節があると言われる日本には、季節を織り込んだ世界一短い詩・俳句があります。市域でも近世から俳句の会がいくつも活動しました。

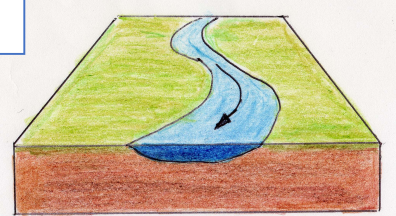
珍しい

河畔砂丘の遺跡

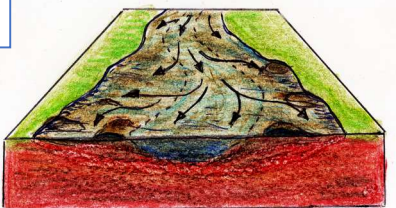
生涯学習課では毎年何件かの遺跡発掘調査を行っています。昨年、当市では初めての“河畔砂丘”上の発掘を行いました。「越谷に砂丘が？」と思われるかもしれませんが、河川沿いに形成された砂丘のことですが、実際、わが国内でも珍しい地形です。北上川や木曽川流域、そして利根川流域とその周辺だけに見られるそうです。それ

はどのようにして形成されるのかを図式化すると次の図のようになります。

1



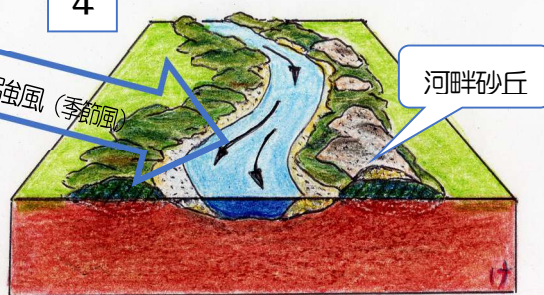
2



3



4



①関東平野は平坦で広大な土地なので、古来大小の河川が網の目のように流れていました。越谷市域では西に綾瀬川、中央部に元荒川、東部に古利根川・中川が流れていますが、その名が示すように、古の荒川、利根川とその支流です。

②それらの河川は度々氾濫を起こしました。洪水は上流から大量の土砂を運んできました。平坦な土地なので、洪水が終わると元の流路の両側には運ばれてきた土砂が残されました。

③こうして何度も洪水が繰り返されるうちに、河川の両側には小高い土地が形成されました。これを自然堤防と言います。そして河川と自然堤防の間には砂地(運ばれてきた火山灰など)が出来る所もありました。

④一定方向から強い風、例えば関東では冬の季節風(からっ風)が吹く地域では流路脇に溜まった砂が飛ばされて、一方の自然堤防上に堆積することがありました。これが河畔砂丘です。

市域の古代の姿『海道西遺跡』

市域で発掘した河畔砂丘上の遺跡は宮内庁埼玉鴨場近くで、「海道西遺跡」と命名されました。20m四方ほどの調査対象地でしたが、竪穴住居址2軒ほか、土坑30数基などが検出されました。遺物は土師器、須恵器、陶磁器類が出土しました。これらを考察してみると、この場所には



竪穴住居址



発掘調査区の空撮



調査の様子

海道??

ところで「海道」という名称についてです。遺跡の名称にはその地域、この場合は小字名が用いられています。この辺りには近世初頭に整備された日光道中（日光街道）が通っていました。そうであるならば「街道」となりそうですが、より古い言い方に「海道」があり、それが地名とされたようです。

「海道西」は旧大林村にあった字名ですが、「海道」の付く字は市域では旧瓦曽根村と旧下間久里村にもありました。（『武蔵国郡村誌』による）

開催します！

市内小学校開校150周年記念展示
「越谷から見た近代教育」
『第二部 終戦前後の学校』

期間：8月22日（火）～9月12日（火）
場所：市立図書館1階展示室

9世紀～19世紀（平安時代～江戸時代）の集落があったことがわかりました。（詳しい内容は市立図書館2階の参考調査室に所蔵されている『海道西遺跡発掘調査報告書1』をご覧ください。）

砂地に住居を建て集落を形成するのは不思議な感じもします。実際、発掘に当たった職員は他の遺跡にはない困難さを体験したようです。けれども古代の人が選んで住んでいるということは砂地も意外にしっかりしていたのかもしれません。自然堤防は前ページの模式図のように河川の氾濫によって堆積した小高い地形なので、古来早い時期に集落が形成され、社寺も多くはこの地域に建立されました。下の市域の地形を表した地図からそのことがわかります。

このように市域にも古代から人々が生活を営んでいました。現在判明している最も古い住居址は「増林中妻遺跡」です。3世紀後半の竪穴住居址が発掘されています。これは九州の吉野ヶ里遺跡の時期と重なります。邪馬台国が日本列島のどこかに在った時期でもあります。邪馬台国の場所や成り立ちはまだ不明のことが多いのですが、その状況によっては越谷市域に在った集落、そこに暮らした人々の生活の様子にも関わってくることでしょう。

越谷市域の地形と遺跡の分布

